

# 不可分の統合体としての光の世界

## — 臨死体験に関する一考察 —

齋藤忠資

### (A) 量子レベルと生命と意識における不可分の統合体

#### ① 量子レベルでの不可分の統合体

我々はすでに通常物質界にみられる時間の流れと空間の分離（距離）による制約がない非局所的なレベルの存在を、量子の波動関数の世界と臨死体験の実例が共に示唆していることを考察した<sup>1)</sup>。量子の波動関数の世界では、物質界のような時間と空間の分離がないと言うことは、すべての部分（個）が完全に相互に結合し合い、互いに干渉し合い（コヒーレンス）、重なり合い（共存）、すべての部分（個）が分離することが不可能な仕方です。統合体と一体性（Oneness）を形成しているということである<sup>2)</sup>。このようなマクロ系集団的量子コヒーレンスは、ボース・アインシュタイン凝集と呼ばれ、超伝導や超流動やレーザー光線などが、その具体的な例である。レーザー光線を用いたホログラムは、すでに考察したように、どの部分にも全体の情報が含まれていて、全体が相互に結合し合って、不可分の統合体を形成しており、D. Bohmが唱える「包み込まれた秩序」では、すべてのものが分離することができない仕方です。全体として統合されている<sup>3)</sup>。

D. Bohmによれば、超伝導はこの電子がもはや独立した状態ではなく、単一の高次の実在の射影として振る舞い、しかもこれらの射影の間に非局所的・非因果的相関が成り立つため、それらは散乱も拡散もされず、共同作業で障害を乗り越えてしまうので、電気抵抗がゼロになり、電流は

いつまでも流れることができる<sup>4)</sup>。

D. E. Watson等が提唱している4次元のenformation fieldでは、量子コヒーレンスが支配しているので、時間と空間の分離のない非局所的連結と万物の相互結合と不可分の全体性がみられる<sup>5)</sup>。

ボース・アインシュタイン凝集体の特徴は、多くの部分がすべて一体となって振る舞うのみでなく、完全に一体にあるという点にある。量子コヒーレンス状態では、システム全体において、個の自由と全体の統合が最大限になる<sup>6)</sup>。すべての個が同じことをする（画一）のではなく、合唱やオーケストラの音楽やジャズやバレエのように、個はアットランダムに自由に振る舞い、その個性を発揮しつつ、全体として一つになるように統合されている（ハーモニー）<sup>7)</sup>。ボース・アインシュタイン凝集体は、波動関数という系全体としての形が、系全ての個を規定している。全体は単に個を集合したものではなく、系の全ての個が全体としての波動関数の形に従っている<sup>8)</sup>。その意味で、ボース・アインシュタイン凝集体は、マクロ系での量子波動関数の表れである。ボース・アインシュタイン凝集の秩序は、部分の非局所的（因果関係なし）関係から生じ、統合はアイデンティティを分かち合う仕方でも重なり合う（共存）というボーズ粒子の性質から生じる<sup>9)</sup>。従って主体と客体、内部と外部といった分離・対立はない。量子コヒーレントシステムでは、システム内のすべての部分が完全に非局所的かつ同時にコミュニケーションすることが可能であり、システム自体を完全な形で知っている。システム内は完全に透明状態（光が散乱せずに透過する）であり、エントロピーもゼロである<sup>10)</sup>。

マクロ系集団システムに量子コヒーレンスが出現するのは、個が全体として波動関数の形という一つのアイデンティティに統合されるボース・アインシュタイン凝集の場合のみである。自然界フェルミ粒子とボース粒子から構成されている。フェルミ粒子は物質になる。ボース粒子は結合する力を持ち、同一の場所にいくつでも共存（重なり合い）して、アイデンティティを共有できる。これは波動関数の完全な重なり合い（共存）を示唆し

ている、ボース・アインシュタイン凝集体はボース粒子（仮想粒子）から成立している。

## ② 不可分の統合体としての生命システム

H. Fröhlichは、生体組織の細胞膜内分子のすべての電気双極子がエネルギーが注入され臨界レベルを超えると、一つのコヒーレンスな量子マイクロ波の場になることを発見した<sup>11)</sup>。これは生体におけるボース・アインシュタイン凝集体である。生体の細胞膜がコヒーレントに励起して、ボース・アインシュタイン凝集体になる時、生物はエントロピーを破って、カオスから秩序を作り出し、生体内の不可分の統合性・一体性を形成する<sup>12)</sup>。

F. A. Poppは、生体のすべての細胞から生体光子が放射されていることを測定し、生体が量子コヒーレンスな光子の場であることを発見した<sup>13)</sup>。

このことは生きているシステムは、量子コヒーレンスの性格を備えた多くの光子のボース・アインシュタイン凝集体に他ならないことを示している<sup>14)</sup>。

M.-W. Hoによれば、生体が液晶であり、生体のすべての部分が量子コヒーレントな全体として機能し、脳と神経システムに先行した身体意識を生成する。身体がコヒーレントならば、身体の中のどの部分も身体全体を互いにあらゆる時間を通じて結合し合っており、身体内の各部分の相互コミュニケーションは時間と空間を超えている（非局所的かつ同時的。例えば左手と右手をシグナル交換する時間もないのに、一致して動かすことができる。）<sup>15)</sup> 身体が液晶であれば、身体の記憶は量子ホログラフィックな形で存在し、身体の中のどの部分も身体全体と情報を交換でき、相互に時間と空間を超えて（非局所的かつ同時的）コミュニケーションできる<sup>16)</sup>。量子コヒーレンスの特徴の一つは、非局所的なコミュニケーションである。生きているシステムは、量子コヒーレンス状態なので、音楽（シンフォニー・

ジャズ) やバレエのように、身体の部分の自由の活動が、身体全体として統合されている (ハーモニー)<sup>17)</sup>。生体は時間と空間を超えたコヒーレンス活動の量子的重なり合い (共存) である<sup>18)</sup>。従ってM.-W. Hoによれば、生きているシステムはマクロ系にみられる量子コヒーレンス現象であり、時間と空間の分離を超えた非局所性がみられ、システム内のすべての部分 が分離できない仕方で、全体として一つの統合体を形成し (Oneness)、量子的に重なり合っている (共存) ので、システム全体に時間と空間を超えた非局所性的かつ同時的相互コミュニケーションがみられる<sup>19)</sup>。

### ③ 不可分の統合体としての意識

脳は分業して情報を処理している。自己として意識を一つに統合するものがなくてはならない。量子コヒーレンス状態のボース・アインシュタイン凝集体では、すべての部分がアイデンティティを分かち合う仕方で、全体として一つとして (Oneness) 統合されており、これが自己意識の統合 (アイデンティティ) を形成している<sup>20)</sup>。脳のボース・アインシュタイン凝集体は池に似ていて、意識内容のすべては、この池に生じる励起 (波) に似ている。脳内のボース・アインシュタイン凝集体はレーザー光線なので、さざ波はホログラムという形で思考・知覚・イメージ等を生み出す。これらの意識内容のすべてをコヒーレンスな全体としてボース・アインシュタイン凝集体が一つに統合しているので、自己は不可分の統合体を形成している<sup>21)</sup>。意識がボース・アインシュタイン凝集体であるならば、意識はボース粒子 (仮想光子) のみに関係している<sup>22)</sup>。

S. Hameroffによれば、意識は脳内のニューロン内のマイクロチューブルにおける量子コヒーレンスによって発生する<sup>23)</sup>。マイクロチューブル内の秩序だった水分子は、superradianceの特性を示し、コヒーレンスでなく電磁エネルギーを、レーザーのようなコヒーレンスな非線形光子パルスに変える<sup>24)</sup>。マイクロチューブルはレーザーのようなコヒーレンスな単一

の光子マイクロパルスを発している<sup>25)</sup>。マイクロチューブルはボース・アインシュタイン凝集体であり、光子のマイクロパルスが単一の光子ホログラムを生成している<sup>26)</sup>。人体の無数のマイクロチューブルが各々単一の光子ホログラムを生成すると、ホログラム的にコード化された情報量は無限になる。マイクロチューブルによって非局所的かつ同時の相互コミュニケーションが可能になる<sup>27)</sup>。意識は中枢神経系内のマイクロチューブネットワーク内で生じる量子コヒーレンス効果の臨界域で、創発的かつcollectiveな仕方では生じる<sup>28)</sup>。マイクロチューブは記憶にも関係しており<sup>29)</sup>、ボース・アインシュタイン凝集体が記憶の基礎である<sup>30)</sup>。意識はボース・アインシュタイン凝集体を基礎としたマクロ系の量子コヒーレンス現象に他ならない。

M.-W. Hoによると、脳は生体の各々の部分の情報を全体として、一つに統合する（コヒーレンス）。意識は多数の情報から構成されている統合体であり、こうして自己（私）が生まれる。自己意識は手足等を同時に動かすことができ（同時的コミュニケーション）、意図や目的は一つに統合されている<sup>31)</sup>。量子コヒーレンス状態の自己意識は自由に活動できる主体である<sup>32)</sup>。M.-W. Hoによれば、意識と生物は絶えず変化するマクロ系における波動関数であり、生きているシステムとして現出している波動関数は決して崩壊することなく、時間と空間の分離を超えて、（非局所的かつ同時的に）、相互作用できる（非局所的心）<sup>33)</sup>。

D. Zoharは、意識は波動関数現象であって、過去の自己の波動関数と現在の自己の波動関数が重なり合うことによって、量子的記憶が生成され、人格的アイデンティティを保持しているとみている<sup>34)</sup>。

完全なコヒーレンス状態になっていて、すべての部分が相互に結合して、分別することができない仕方では一つの統合体を形成しているのは、すでに指摘したように5次元界であって、我々の物質界にその射影として不完全な形でコヒーレンス状態がみられる（超伝導、ホログラム等）。このことは生命と自己意識のコヒーレント状態も5次元界の射影としてみるこ

とができることを示していよう。脳・肉体（物体）による制約があるので、生命と意識も完全な形で時間と空間の制約を超えている訳ではなく、完全な形で量子コヒーレンス状態である訳ではない<sup>35)</sup>。M.-W. Hoは、人間の意識が変容して、時間と空間の分離がない世界に共振するのが神秘体験であるとみている<sup>36)</sup>。

F. D. Peatによれば、未来は現在の内にはない、全く新しいものから生じる可能性がある（非ユニタリー変換）。非ユニタリー変換では、宇宙は存在しなくなり（死）、全くの時間の外にあり、そこで創造の源泉に出会う。これは科学を超えた所にあり、時間と空間を超えた神秘体験にみられるユニタリーの世界（自然法則が支配している）は、広大な非ユニタリーの世界の一部でしかない<sup>37)</sup>。物質の世界は時間と空間によって分離しているが、特殊な例としてマクロ系でも生命と意識には、不完全な形ではあっても、時間と空間の分野を超えた相互結合、重なり合い（共存）、不可分の統合体（Oneness）といった量子コヒーレンスの性格がみられる。その意味では生命と意識は不完全な形であるが、マクロ系における量子の波動関係の表れとみてもよいであろう。完全な形で、時間と空間を超えた量子コヒーレンスな世界は、神秘体験にみられるが、最もはっきりした形では、臨死体験の光の世界にみられる。そこで次に臨死体験者がかいた光の世界について考察してみよう。

## (B) 臨死体験の光の世界の特徴

### ① 不可分の統合体・万物の一体性・相互結合

臨死体験の光の世界の特徴の一つは、体験者（個）が消滅せずに、光の世界（全体）に分離することができない仕方一つになり（Oneness）、アイデンティティを共有するということである。

「私たちは各々別個の存在であって、皆一つで「光輝く一つのもの」の

一部分なのでした。・・・私たちは皆あの愛の光の中におり、今ではもう地上にいた時のように、離ればなれで孤独ではありませんでした。むしろ各人は全体の一部をなしており、その全体として、一つのものだったのです。」<sup>38)</sup> この事例では体験者（個）が、光の世界（全体）の一部分であり、光の愛が不可分の統合体の原理になっていることが示されている。

「過去・現在・未来の宇宙全体が一つのセンターに収れんし、不可分の全体をなしていた。すべてはこのセンターに依存し、このセンターは不変であった。それは純粋な意識の光であり、それがすべてのものを照らしていた。すべてのものを含むものは一つの物 (a thing) ではなく、nothingであった。」<sup>39)</sup> この例は、宇宙全体の不可分の全体は純粋な意識の光であり、nothingであると述べている。

「光は安らぎと喜びを放っていた。私はとても幸せであった。人間の命に対する物理上のルールは、すべてこの統合的リアリティと比べれば無に等しい。リアリティは単に地上の命のみではなく無限の命でもあった。すべては単に結合しているのではなく、一つであった。私は光と共に全体という感覚をもった。すべては私と共にあるという感覚をもった。すべてのものへの愛と思いやりと寛容を感じた。」<sup>40)</sup>

「私は光と一つになり、光の部分になり、もはや単なる個人ではなかった。」<sup>41)</sup>

「神は内にも外にも至る所におり、光の川はすべての魂の統合であって、我々は皆神の一部であり、神は万物である。」<sup>42)</sup>

「宇宙の中心の光の世界では、すべてのものが結合し合い、すべてのものが光の部分である。」<sup>43)</sup>

文章上は光の世界という文言がなくても、光の世界のことを前提にしている例を挙げると、

「我々は（部分）は全体の一部であり、どの部分も全体であった。それはOneness of the WholeとWholeness of the Oneの世界であり、偏在と無条件の愛の世界であった<sup>44)</sup>。」どの部分も全体を含むというのは、まさにホ

プログラムの原理に他ならない<sup>45)</sup>。

「すべてのものは不可分の一つの体であり、有機的結合の生けるコスミックな織物の中ですべてのものは結合されている。」<sup>46)</sup>

「リアリティの全体知識が私に現れ、私は宇宙の多次元性をみた。私の意識は物理レベルを超えて拡大した。私は全体の一部分であって、区別はなかった。私には体の感覚はなく、制約や境界の感じもなかった。」<sup>47)</sup> この事例では意識が物質（肉体）の制約を超えて多次元宇宙に拡大し、全体の一部分となって、宇宙全体の知識を得たとされている。

「私はすべてのものの部分であった。私はすべてのものの内部に存在していた。私は形を持っていなかった。私は存在の完全な状態であった。私は端的に存在のみであった。」<sup>48)</sup> この例では光の世界で本人が不可分の統合体の一つになった時、私には形はなく（無相の自己！）、存在の完全な状態であり、純粋に存在のみになっていたといわれている。

「私自身の意識を持っていたが、私はもはや分離した実体ではなかった。」<sup>49)</sup>

次の事例は、光の世界で死者と出会った状況を述べている。

「死んだ祖母と光速でコミュニケーションした。すべての知識が即時に一度に伝わった。どの事柄も全体の関連の中で完全に分かった。パズルのように、知識はぴったりをはめ込まれた。どの事柄も即時に全体の中で結合していた。」<sup>50)</sup> この例は、光の世界の不可分の統合体から、すべての知識と完全理解が生じることを示している。

「地上で出会った死者たちと再会した。我々は相互に結合し、パズルの部分のようにすべてが完全にはめ込み合っているので、誰一人でも欠けていては完成しなかった。」<sup>51)</sup>

「指紋のように独自でかつ個人である私は、同時に無限で調和のある秩序のある全体の部分であった。」<sup>52)</sup>

「人間のエッセンスと花のエッセンスが池の中の水滴のように個であり、かつcollectiveである。」<sup>53)</sup>



「私は死んだ義兄Willsと分かれていたと同時に一つであった。」<sup>54)</sup>

光の世界の特徴の2番目は、すべてのものが一体であるという点である (Oneness)。

「光の存在には無条件の愛が溢れていて、体験者が光と一体となり、完全になり、同時にすべてのものになった。」<sup>55)</sup>

「より高いレベルでは我々は光と同質になった。それは最高の周波数で最も純粋な形であり、ポジティブなものもネガティブなものもすべては一つのもの (Oneness) として結合されていた。」<sup>56)</sup>

「すべてのものは生きている光から作られている。生きている光がすべてであり、すべてのものは一体である (Oneness)。」<sup>57)</sup>

臨死体験の光の世界の特徴の3番目は、すべてのものが完全な仕方で互いに結びつき合っているということである。「すべては同じ光の源に由来し、透明な網で互いに結ばれている。そして光の存在と互いに結び合っていた。」<sup>58)</sup> この例は光が相互結合を生み出す源であることを示している。

「光の世界では、知識が瞬時に与えられ、すべてのものが相互に結合し、万物の根は一つであった。」<sup>59)</sup>

「(光の世界では) 我々は皆互いに結び合っていた。」<sup>60)</sup>

## ② 宇宙の全知識をもつ光の存在

臨死体験が垣間見た光の世界では、すべてのものが互いに結び合っ、一体性と不可分の全体性を形成し、光の存在は宇宙全体の全情報を持っている (宇宙全体の情報センター)。典型的な事例をいくつかあげてみよう。

「意識だけの世界に入った私は“膨大な意識”とつながっていた。そして“膨大な意識”から自由に情報を取り出すことができるようになっていた。“膨大な意識”の中には、我々が生きている世界を司るあらゆる情報がある。私はこの世界に存在すると同時に、この世界の情報の一つとして“膨大な意識”の中にも存在する。・・・そこで“膨大な意識”の中にあ

る世界の情報は、元々我々の生きている世界そのものの情報だとすれば、“膨大な意識”から現実の世界の情報を得ることができる。私が入手したこの世界の情報こそが現実の過去・現在・未来であった。」<sup>61)</sup>

「光は愛であり、私の霊体は光と一体となり変容した。光の内では、万物が光と結合していて、光は万物の中に常に永遠に存在している。光は人知を越えた愛と知識であり、光は宇宙全体の事柄の全知識である、光にはすべての本に書かれている知識がある。宇宙の始めから終わりまで。」<sup>62)</sup>

「光の世界には、限界も境界もなく、内部と外部もない。すべての完全な知識を光の存在は備えている。」<sup>63)</sup>

「宇宙の中心の光には、宇宙全体のすべての知識がある。」<sup>64)</sup>

この光の世界の全知識は、図書館<sup>65)</sup>や大聖堂にみえる情報発信センター<sup>66)</sup>や全情報の記録保管所<sup>67)</sup>等にイメージとして具象化している。本質（全知識）は同じでも、イメージが異なる例である。

「多次元宇宙には、過去と現在と未来の全ての知識があった。」<sup>68)</sup>

「4次元では全ての時代の全て人の全知識の総計（過去・現在・未来）を私は見つけた。全ての知恵は集団的知識のプールから由来し、我々が学ぶ全てのことも、万人が利用出来るようにプールされる。」<sup>69)</sup>

光の存在が臨死体験の過去と未来にわたる全情報を所有していることは、生涯展望から明らかである<sup>70)</sup>。また光の存在が「まだ死ぬ時ではない」と臨死体験者に告げるのは、光の存在が臨死体験者の死ぬべき時を知っていることを示している。

### ③ 全知識の獲得

宇宙の全知識を所有している光の世界（光の存在）と一体となると、臨死体験者も非局所性かつ瞬時のコミュニケーションが可能になり、その全知識を与えられることになる。代表的な事例をいくつか示そう。

「リアリティの全体知識が私に現れ、私は宇宙の多次元性をみた。私の

意識は物理レベルを超えて拡大した。私は全体の一部分であり、区別はなかった。私には体の感覚がなく、制約や境界を感じなかった。」<sup>71)</sup> この事例は物質レベルの肉体を制約を超えて意識が全体へと拡大することによって、リアリティ全体の知識が与えられることを示している。

光の存在から全知識を授けられることが明記されている例をあげると、

「光の世界では愛と知識が大切であった。光の世界ではすべての情報がすぐに入手できた。全てのもものが結合しているということを理解するのが目的である。」<sup>72)</sup> この例では、全知識が与えられるのは、すべてのものが結合していることを理解するためであると明言されている。従って単なる情報とイメージのみではなく、一体になって直接体験的に知るということである。

「臨死体験で最も重要な点は、光によってもたらされる全面知識である。」<sup>73)</sup>

「宇宙のセンターの光と一体になると、私は全知識を吸収した。」<sup>74)</sup> この例では、光は宇宙のセンターであると述べられている。

「光の存在は、すべての知識を持っていて、全ての人に即座に答えが与えられる。生き方の問題でも、宗教上の問題でも、将来の出来事についても。」<sup>75)</sup>

「光は愛と同じ仕方で、**universal knowledge**を伴って、私の霊的存在の内に振動しながら浸透してきた。」<sup>76)</sup>

「この方（イエス）の光は、知識だった。その光はあらゆる真理で私を満たす力であった。・・・質問が浮かんだその瞬間に答えが与えられてしまう。しかもその答えは完全無欠なものだった。」<sup>77)</sup> この例では知識の伝達が時を要せず、瞬時に行われることを示している。光の存在と臨死体験が一体であれば、当然のことと思われる。

以下の事例では、直接光について言及されていないが、前後関係からみて、光の世界での事象であることは前提されている。「(臨死体験の時) 包括的な全知識を持った。空間と時間を超越したという感覚だった。」<sup>78)</sup> 時

間と境界を越えて全知識をキャッチするということは、宇宙の未来と過去の知識を入手するということである。ここでも単なる情報やイメージのみではなく、過去と現在と未来が分離しないで一体になっているので、直接体験的に未来と過去を知ることが意味されている<sup>79)</sup>。

「自分の生涯のフラッシュ・バックをみた後だったように思います。突然あらゆる全知識—この世の初めから未来永劫に続く全知識—を掌握したように思えた。一瞬にして全時代のあらゆる秘密、宇宙、星と月、ありとあらゆるものの持つ意味を悟った。」<sup>80)</sup>「未来と過去の全知識が一度に示された。」<sup>81)</sup> これらの2例では全知識の伝達が瞬時に行われることを示している。

「この世界の初めから終わりまで、過去と未来の全ての知識が与えられた。」<sup>82)</sup>

「巨大なコンピューターに貯えられた全情報が、一瞬にして私の脳の中へダウンロードされるような感じであった。」<sup>83)</sup> この例では、全知識の瞬時の伝達がスーパーコンピューターに例えられている点で注目に値する。

全知識の伝達が瞬時に行われる例としては、「・・・その場所そのものが知識で、ありとあらゆる知識や情報がすぐに手に入り、・・・それを吸収し・・・瞬時にして答えが分かってしまう・・・精神を集中すると自動的に知識が流れ込んでくる。」<sup>84)</sup>

「私は完全な知識に満たされた。」<sup>85)</sup>

「全ての間に答えが与えられ、全知識が与えられた。」<sup>86)</sup>

「私は全てを知っているように感じた。そして全てが意味をなすように感じた。・・・私は数学と科学のことは少しも知らなかった・・・突然私は計算や惑星が作られた仕方について直感的に分かった・・・私がそれまで知らなかった無が存在するのを感じた。」<sup>87)</sup> この例で注目に値するのは、無が存在することが分かったという点にある。

臨死体験の事例の中には、本人が決して知り得ない情報—例えば、その時点では生きている人がまもなく死ぬことや、本人は知らされていない知

人や友人の死や<sup>88)</sup>、本人が生まれる前に死んでいる身内に出会ったり、流産等で死んだために本人には知らされなかった兄弟等に出会ったり、まだ生まれていない将来の自分の子供に出会ったりするのも、光の世界の全情報と関連していよう。

#### ④ 完全理解

不可分の統合体であるその存在と臨死体験者は一体となり、光の存在から宇宙全体に関する全情報を授けられるので、全ての存在と非局所的かつ瞬時のコミュニケーションが可能となり、すべてのものが完全に理解できるようになるのは当然の帰結であろう。そこには誤解も隠し事もない。代表的な事例をいくつか挙げてみよう。

「全知識が即時に一度に伝わった。どの事柄も全体の関連の中で完全にわかった。パズルのように知識はぴったりとはめ込まれた。どの事柄も即時に全体の中で結合していた。」<sup>89)</sup> この例は、全知識と完全理解が光の世界ではどの部分も一つの全体として統合されていることから由来することを示している。

「全面的な知識を持った感じは、問うことなしに全てが分かったということである。」<sup>90)</sup> この例では光の存在から完全理解が与えられることは明記されていないまでも、前後のコンテキストから前提されている。

「消滅点にある光と一つになると、完全に宇宙を理解できた。」<sup>91)</sup>

「この世の光とは全く異質の光には完全な理解と完全な愛があった」<sup>92)</sup>

「光には全面的な理解と愛と全き安らぎがあった」<sup>93)</sup>

「この時、生と死が完全な自然のプロセスとして完全に理解できた」<sup>94)</sup>

「そこにはあらゆる情報と全ての全面的な理解があり、人生の目的も分かった」<sup>95)</sup>

「過去と未来の全てを理解したので、何の質問もなかった」<sup>96)</sup>

人生回顧との関連ではあるが、B. イーディは次のように述べている。

「どんな思想であれ、どんな意見であれ、どんな断片的な知識であれ、正確に理解できないものではなく、誤解は絶対あり得ない・・・人が何をしたかは勿論、その理由や他の人がその事実をどう考えるようになったかまで、全て分かる。一つの事柄に関連する事実があらゆる角度から考えられる全ての観点から明らかにされている。この世では理解できなかった出来事や人間の考え方についても、その全体像が浮き彫りにされている・・・その時その人がどう感じたかまでも、私は感じる事ができた。その人の痛みや喜びや心の高まりまで分かってしまうのは、私がおの人の命を生きていたからです」<sup>97)</sup> 人生回顧では、単に過去の記憶が映像の姿で蘇るのではなく、過去の出来事を他者と一体になった状態で再体験するので、相手の気持ちまで完全に理解できるのである。

「光の世界には誤解というものはない。隠されているものは一つもなかった。」<sup>98)</sup> 相互に完全に理解し合えるということは、完全なコミュニケーションが成立しているということであり、心同志が言葉なしに直接意志を通じ合うことができる（テレパシー）ということと関連している。

## ⑤ 完全知覚

光の世界は、すでに述べたように、すべての部分が不可分の仕方で全体として一つになるように統合されているので、非局所的かつ同時的コミュニケーションが可能である。完全なコミュニケーションによって全情報を全ての部分に非局所的かつ同時に伝達するためには、すべての存在が完全知覚を備えていなければ不可能であろう。完全な存在である光を完全な知覚を備えている宇宙意識と一つになることによって、臨死体験者の意識は、完全な知覚を備えることになる。

事例を挙げると、「体外離脱すると、私は超感覚を持ち、すべてのものを知覚できた」<sup>99)</sup>

「靈的な状態にある時、知覚には限界がないような感じがした。まるで

ありとあらゆる所をみることができるよう思えた」<sup>100)</sup>

「各自はメンタルな霊的な体を持ち、メンタルな霊的な目で、初め光の世界がみえる。メンタルな霊的な体はすべてのものを知覚できる。」<sup>101)</sup>

臨死体験にみられる完全知覚の具体的な例としては、完全な視覚(360度完全視野)、空間透視、遠隔透視、内部透視等がある<sup>102)</sup>。先天性全盲者も臨死体験の時には、視覚を持つのも、このような完全知覚の例であるう。<sup>103)</sup>すでに発表した私の論文の中で引用した以外の360度全方位視野の事例を挙げてみよう。

「体外離脱後、水平状態にもかかわらず360度見えた。・・・私は死んだ父を抱擁したが、私の背中を抱擁している父の両手を見ることができた。・・・壁の反対側を振り返って見ると、私の前方に見えた」<sup>104)</sup>

「まわりを360度見ることができ、一度多くのことがわかった」<sup>105)</sup>

「私は肉体はなく、360度の視野を持った」<sup>106)</sup>

「体外離脱後に、私は360度の現象を体験した」<sup>107)</sup>

360度全方位視野は、球状視野である。W. Buhlmanは体外離脱した未知のエネルギー体全体が周囲の相互作用することによって、360度の視野が生まれると述べている<sup>108)</sup>。具体例を示すと「この時360度が同時にみえた。私は空間中の眼球のようだった。私は偏在するtotal awarenessであり、universal knowledgeを獲得した」と証言されている<sup>109)</sup>。K. RingとS. Cooperは先天性全盲者が臨死体験時に持つ資格はtranscendental awarenessによって初めて可能となり、肉眼を通さずに球体上である超意識全体でみるので、360度の全方位視野が可能となると見ている<sup>110)</sup>。

未知のエネルギー体全体が知覚センサーになっていることを示す臨死体験の事例を挙げると、「まるで私の存在全体が目と耳を持っているかのようだった。私は全てのものを知覚できた。」と言われている<sup>111)</sup>。体外離脱後の未知のエネルギー体(light body)は、球体であることを示す事例がある。W. Buhlmanによれば、未知のエネルギー体は純粹意識の輝く光の球体である<sup>112)</sup>。他の事例では「私は光のボールになった。そのボールは光

り輝きながら猛スピードで回転していた。そのボールから手と足が突き出していた」<sup>113)</sup> 以上の2例では未知の球体は光であると明言されている。

「自分が丸いボールのような一個の小さな球体—バズーカ砲の弾丸になったような感じがした。」<sup>114)</sup>

「その光の球体はソフトボール位の大きさであった」<sup>115)</sup>

この球体のエネルギー体は伸縮自由であるのを次の2例は示している。

「光の中でも私は私の姿形の境界を感じた。同時に私は光との一体感を持った。私は自分の光を通して数マイルまで拡大し、それからまた2・3フィートの卵形のエネルギーの塊に収縮した。」<sup>116)</sup> この例は、球体が光であることも示している。

「肉体に戻った時、私は小さな散弾（直径0.18インチ）位の大きさでした。それから私は膨らんでいって、体にびったりと納まりました。」<sup>117)</sup> 球体の未知のエネルギー体が伸縮自由なのは、はっきりした形をもつ実体ではなく、雲のように広がった波動のようなものである。「私は波動のようなものだった。実体がなく充電されている状態に近い。それは小さくて円形で、はっきりした輪郭はなく、雲のようなもの。それは独自のケースに収まっているようだ。」<sup>118)</sup> 従って未知のエネルギー体は正確には境界が流動的な区別された未知のエネルギーの振動する場といった状態にあると思われる。

## ⑥ テレパシー

すでに述べたように、光の世界ではすべてのものが不可分の仕方での一つの統合体を形成していて、互いにアイデンティティを共有しているので、物質界の世界のような主体と客体の分離はなく、非局所的かつ同時的コミュニケーションが成立しているので、意識同志は言葉なしに直接通じ合うことができる。そこには誤解とか隠し事とかごまかしといったことが生じる余地はない。典型的な臨死体験の事例をあげてみよう。



「個はあるが、光によって一体となっているので、思いが直接言葉なしに互いに分かった。」<sup>119)</sup>

「光の存在と私は、言葉なしに心に直接コミュニケーションした。考えることに直ちに相手が分かった。」<sup>120)</sup>

「私と光の存在は互いに相手の思いを読むことができたので、言葉は必要なかった。」<sup>121)</sup>

「言葉なしに心から心へと直接、心の思いが即時に分かり、隠し事もなく、誤解もなかった。」<sup>122)</sup>

「言葉ではなく、mind thoughtsでコミュニケーションした。」<sup>123)</sup>

「この時のmindの会話は、言葉を用いない仕方でのコミュニケーションである。」<sup>124)</sup>

「言葉は発しないが、思いははっきりと分かった。」<sup>125)</sup>

### (C) 結論

以上の考察によって、明らかになった点を最後にまとめてみよう。

- ① 5次元界では全ての部分が互いに結合し、分離できない仕方で全体として一つに統合されているという完全な量子コヒーレンス状態になっているものと思われる。
- ② 物質の世界のマクロ系では生命と意識現象として量子コヒーレンス状態は不完全な形で現出しているが、臨死体験者が垣間見た光の世界では、それが完全な形で見られることが明らかになった。
- ③ このことは5次元界の光の世界が完全な状態であり、宇宙の本体・根源・真の実在であって、その作用が4次元時空のこの物質の世界では、不完全な形ではあるが、生命と意識現象という仕方で射影（ホログラム）されているものと思われる。従って、光の世界と生命・意識現象には量子コヒーレンス状態という点でアナロジーがみられるが、両者の相違は、物質の世界の脱コヒーレンス状態によって生じるものと考えられる。

- ④ 光の存在は宇宙の全知識・全情報を持っているので、光と一体になった臨死体験者は、宇宙の全知識を手に入れることができ、すべて人の事が完全に理解する事が可能となり、完全な知覚能力を備えることができるようになり（360度完全視野、透視、未来と過去への透視等）、テレパシーが可能になるものと思われる。

### 【 註 】

- 1) 時間と空間の分離を超える意識－臨死体験に関する一考察－、人間文化研究12、2003、1以下。
- 2) R. Nadeau & M. Kafatos, *The Non-Local Universe*, Oxford University: Oxford, 1999; A. D. Aczel, *Entanglement, Four Walls Eight Windows*, 2001.
- 3) 拙論、ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界、人間文化研究、11、2002、31～50；D. Bohm & B. J. Hiley, *The Undivided Universe*, Routledge, 1993；D. ボーム、全体性と内臓秩序、青土社、1986。
- 4) 全体性、318。
- 5) D. E. Watson, G. E. R. Schwarz, L. G. S. Russek, *The theory of enformed systems*, *The Noetic Journal*, vol. 2, 1999, 159～172.
- 6) M.-W. Ho, *The Rainbow and The Worm*, 2nd. World Scientific, 1998, 59.
- 7) F. D. ピート、賢者の石、日本教文社、1995、100。
- 8) F. D. ピート、賢者の石、101。
- 9) D. Zohar & I. Marshall, *Quantum Society*, Quill, 1994, 76.
- 10) M.-W. Ho, *Rainbow*, 229.
- 11) Coherent excitations in active biological systems. In F. Gutman & H. Keyer (ed.) *Modern Bioelectrochemistry*, Plenum. 1986, 241～261; Long-range coherence and energy storage in biological systems, *International Journal of Quantum Chemistry*, Vol. 2, 641～649.
- 12) D. プーハー、クォンタム・セルフ、青土社、1991、115。
- 13) F. A. Popp, (eds.) *Recent Advances in Biophoton Research and Its Applications*. Singapore: World Scientific 1992; F. A. Popp, *Physical aspects of biophotons*, *Experientia*, 44, 1988 1576～1585.
- 14) D. プーハー、クォンタム・セルフ、321。
- 15) M.-W. Ho, *Organism and psyche in a participatory universe*. In D. Loye (ed.) *The Evolutionary Outrider*, Westport, CT: Praeger, 1998, 59; M.-W. Ho,

- Rainbow, 177~8. 212. 241~2.
- 16) M.-W. Ho, Rainbow, 195.
  - 17) M.-W. Ho, Organism 55; Toward an indigenous western science, in W. Harman (ed.) New Metaphysical Foundations of Modern Science, Institute of Noetic Sciences, 1994, 200.
  - 18) M.-W. Ho, Rainbow, 93,213~4.
  - 19) The organic revolutions in science, [www.ratical.org/co-globalize/Mae Wan Ho/organic.html](http://www.ratical.org/co-globalize/Mae%20Wan%20Ho/organic.html).
  - 20) I. Marshall, Consciousness and Bose-Einstein Condensates. New Ideas in Psychology 7, 1989, 73~83; D. プーハー、クォンタム・セルフ、113~114; D. Zohar, Consciousness and Bose-Einstein Condensate, in S. Hameroff et. al. Toward a Science of Consciousness I, MIT, 1996, 445~9.
  - 21) D. Zohar, Quantum Society, 84~85.
  - 22) D. プーハー、クォンタム・セルフ、144.
  - 23) S. R. Hameriff, Quantum coherence in microtubules: A neural basis for emergent consciousness? Journal of Consciousness Studies, Vol.1-no.1, 1994, 91~118.
  - 24) Jibu, M, S. Hagen, S. R. Hameroff, K. H.Rribram and K. Yase ,Quantum optical coherence in cytoskeletal microtubuls: Implications for brain function, Bio Systems 32, 1994, 95~209.
  - 25) Popp, F, Li, K., Nagl, W., and Klima, H., In dications of optical coherence in biological systems and its possible significance, in H. Fröhlich and Kremer F. (Eds.), Coherent excitations in biological systems, Springer-Verlag, 1983, 117~122.
  - 26) Hirano, I. and Hirai, N., Holography in the single-photon region. Applied Optics, 25, 1986, 1741~1742.
  - 27) Th. E. Beck and J. E. Colli, A quantum biomechanical basis for near-death life reviews, J. of Near-Death Studies, vol.21 no.3, 2003, 180.
  - 28) D. Koruga, Informations physics: In search of a scientific basis of conscipusness. in D. Koruga and D. Rakovic (eds.). Consciousness: Scientific challenge of the 21st Centry, European Centre for Peace and Development of the United Nations University for Peace, 1995, 243~261.
  - 29) Koruga, D., Hameroff, S., Withers, J., Loutsy, R., and Sundareshan, M. (1993). Fullerence C60: History, physics, nanobiology, nanotechnology, North-Holland.
  - 30) Stuart, C. I. J. M. et al., Mixed Brain Dynamics: Neural memory as a macroscopic ordered state, Foundations of physics, vol, 9, 1979.
  - 31) Organism 194~195.

- 32) Rainbow, 245; western science, 207~208.
- 33) M.-W. Ho, Rainbow 247; western science, 208; Organism 63.
- 34) クォンタム・セルフ、143. 168.
- 35) 賢者の石、102~103.
- 36) M.-W. Ho, Rainbow 230~231. 242.
- 37) 賢者の石、161~191.
- 38) 片桐すみ子編、輪廻体験、人文書院、1991、77.
- 39) When Time Stood Still, [www.nderf.org/When\\_Time\\_Stood\\_Still\\_.htm](http://www.nderf.org/When_Time_Stood_Still_.htm).
- 40) Ph. L. Berman, The Journey Home, New York: Pocket Books, 1996, 35~36.
- 41) Mary's NDE, [www.nderf.org/mary's-NDE.htm](http://www.nderf.org/mary's-NDE.htm).
- 42) R. Paraslow, NED, [www.spiritualtravel.org/OBE/rparaslow.html](http://www.spiritualtravel.org/OBE/rparaslow.html).
- 43) Gail T's NDE, [www.nderf.org/Gail % TS % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Gail%20TS%20NDE.htm).
- 44) W. Buhlman, The Secret of the Soul, Harper San Francisco, 2001, 62. 66.
- 45) 拙論、ホログラフィック宇宙、34~35.
- 46) K. Ring, Lessons from the Light, Insight Books, 1998, 290.
- 47) D. Goble, Near Death Experience, [www.artnet.net/dgoble/nde.html](http://www.artnet.net/dgoble/nde.html).
- 48) Burke's NDE, [www.nderf.org/Burke's % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Burke's%20NDE.htm).
- 49) Three times into the light-Mark Giordani's Journey, Vital Signs, 21~2, 18.
- 50) R. Wallace, The Burning Within, Gold Leaf Press, 1994, 99.
- 51) 同書. 107.
- 52) V. Solow, I died at 10. 52, in Reader's Digest., 105, 1974, 108.
- 53) Jean's NDE, [www.nderf.org/Jean's\\_NDE.htm](http://www.nderf.org/Jean's_NDE.htm).
- 54) L. Martin, Searching for Home, Cosmic Concepts, 1996, 17.
- 55) K. Ring, Lessons, 46.
- 56) S. S. Farr, What Tom Sawyer Learned from Dying, Hampton Roads Publishing Company: Norfolk, 1993, 53.
- 57) Lana's NDE, [www.nderf.org/Lana's-nde.htm](http://www.nderf.org/Lana's-nde.htm).
- 58) A. Antonette, Whispers of the Soul, The Bernadette Foundation, 1998, 28. 32.
- 59) B. イーディー、死んで私が体験したこと、同朋社出版、1995、72.
- 60) Jean's NDE.
- 61) 木田鶴彦、宇宙の記憶、龍鳳書房、1995、96~97.
- 62) D. Morrissey, You Can See The Light, Stillpoint Publishing, 1997, 34~35.
- 63) Lana's NDE.
- 64) W. Buhlman, The Secret, 66. 132~133.
- 65) P. M. H. アトウォーター、未来の記憶、原書房、1997、133; B. イーディー、死んで私が体験したこと、116; C. R. Lundahl & H. A. Widdison, The Eternal Journey, Warner Books, 1997, 161.

- 66) Journey, 161.
- 67) C. サザーランド、光のなかに再び生まれて、人文書院、1997、136.
- 68) D. Goble, Near-Death Experience.
- 69) Jean's NDE.
- 70) 拙論、ホログラフィック宇宙、36～37；4次元空間と臨死体験、人間文化研究9、2000、4～14.
- 71) D. Goble, Near Death Experience,.
- 72) R. ムーディー、光の彼方に、TBSブリタニカ、1990、62～63.
- 73) SS. Farr, What Tom Sawyer, 39.
- 74) W. Buhlman, The Secret, 62. 66. 132～133.
- 75) M. Grey, Return From Death, London: Arkana, 1985, 118～119.
- 76) N. Dougherty, Fast Lane to Heaven, Hampton Roads Publishing Company, 2001, 25.
- 77) B. イーディー、死んで私が体験したこと、70.
- 78) J. Ch. Hampe, To Die Is Gain, Atlanta: John Knox, 1979.
- 79) 拙論4次元空間と臨死体験、7～14.
- 80) R. ムーディー、続かいたまた死後の世界、評論社、1989、16～17.
- 81) Robert's NDE, [www.nderf.org/robert-c'snde.htm](http://www.nderf.org/robert-c'snde.htm).
- 82) Three times into the light, 17.
- 83) Peter & Elizabeth Fenwick, The Truth in the Light, Headline, 1996, 176.
- 84) R. ムーディー、続かいたまた死後の世界、22～23.
- 85) K. Williams, Nothing Better Than Death, Xlibris Corporation, 2002.
- 86) Analisa D's NDE, [www.nderf.org/Analisa & 20 D's % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Analisa & 20 D's % 20 NDE.htm).
- 87) K. Ring, Near-death and out-of-body experiences in the blind, Journal of Near Death Studies, 16, 1997, 111.
- 88) 拙論、死んでいたことを知らなかった死者のヴィジョン、人間文化研究、5、1996、35～60.
- 89) R. Wallance, The Burning Within, 99.
- 90) A. S. Gibson, Glimpsed of Eternity, Bountiful UT: Horizon, 1993, 218.
- 91) M. モース、臨死からの帰還、徳間書店、1993、27～28.
- 92) R. A. Moody, Life After Life, New York: Bantam Books, 1971, 63.
- 93) R. M. Sullivan, Combat-related near-death Experiences, Anabiosis, vol.4 no.2, 1984, 147.
- 94) D. Goble, The Meaning of life and death 2, [www.beyond the veil.net/articles.html](http://www.beyond the veil.net/articles.html).
- 95) S's NDE, [www.nderf.org/S's % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/S's % 20 NDE.htm).
- 96) Burke's NDE.
- 97) 死んで私が体験したこと、116～117.

- 98) K. Ring, Lessons 95.
- 99) C. Green, *Out of Body Experiences*, Oxford: IPR, 1968, 78.
- 100) R. ムーディー、かいまみた死後の世界、評論社、昭和60年、69.
- 101) D. Goines's NDE, [www.chariscorp-wordgems.com/death.nde.case.goines.html](http://www.chariscorp-wordgems.com/death.nde.case.goines.html).
- 102) 拙論、4次元空間、1～22；ホログラフィック宇宙、37～42.
- 103) 拙論、先天性全盲者の臨死体験、人間文化研究、7、129～139.
- 104) Linda, *Encounters with death*, home. [swipnet.se/realitycenter](http://swipnet.se/realitycenter).
- 105) Duane's NDE, [www.nderf.org/Duane's %20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Duane's%20NDE.htm).
- 106) Burke's NDE.
- 107) *When Time Stood Still*.
- 108) *The Secret*, 64. 73. 75. 82. 95. 148.
- 109) Jo Dee Chenaur, *Into The Universe*, [www.seattle.iands.org/stories/universe.htm](http://www.seattle.iands.org/stories/universe.htm).
- 110) *Mindsight*, William James Center for Consciousness Studies, 1999, 161～167.
- 111) K. Ring, *Life at Death*, New York: Quill, 1982, 93. 97.
- 112) *The Secret*, 40. 65.
- 113) M. Morse, *Closer to the Light*, New York: Villard Books, 1990, 138.
- 114) R. A. Moody, *Life After Life*, 49.
- 115) [www.homestead.com/LA\\_therapist/files/Chapter-3.doc](http://www.homestead.com/LA_therapist/files/Chapter-3.doc).
- 116) K. Ring, Lessons, 14.
- 117) M. Morse, *Closer to the Light*, 154.
- 118) R. A. Moody, *Life*, 48.
- 119) Lana's NDE.
- 120) H. Storm, *My Descent into Death*, London: Clairview, 2000, 33～34.
- 121) Chae's NDE, [www.nderf.org/Chae's % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Chae's%20NDE.htm).
- 122) Lana's NDE.
- 123) Gina's NDE, [www.nderf.org/Gina' % 20 NDE.htm](http://www.nderf.org/Gina'%20NDE.htm).
- 124) Christianne's NDE, [www.nderf.org/Christianne's \\_NDE.htm](http://www.nderf.org/Christianne's_NDE.htm).
- 125) K. Ring, Lessons 296.